

追体験についての一考察：池見陽へのインタビューを通して

その他のタイトル	Re-experiencing : An Interview with Akira Ikemi
著者	小田原 康貴, 島田 諒也, 池見 陽
雑誌名	Psychologist : 関西大学臨床心理専門職大学院紀要
巻	10
ページ	9-16
発行年	2020-03-16
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019973

追体験についての一考察：池見陽へのインタビューを通して

Re-experiencing: An Interview with Akira Ikemi

小田原康貴・島田諒也・池見 陽
関西大学臨床心理専門職大学院

Koki ODAHARA, Ryoya SHIMADA, Akira IKEMI
Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

最近、池見が執筆する心理療法論に散見される「追体験」という語についての理解を深めることが本論の目的であった。まず、追体験について池見がすでに論じていることをまとめ、次に国内の心理学文献を中心に池見以外の研究者による追体験の記述を調べた。さらに池見へのインタビューを行い、そのインタビューで語られた内容について考察した。考察では、追体験のもつ特徴と聞き手の追体験が話し手にもたらすものといった2点について、これまでの池見の記述に見当たらないもの、あるいは強調されていない点に注目した。追体験は人が生来持つ機能であると池見は考え、他者の体験をそのまま理解しようという目論見があるときに追体験が立ち現れていること、その追体験は全く新しい間主観的な現実であることが考察された。

キーワード：追体験、体験過程理論、他者理解、池見陽

Abstract

The purpose of this paper was to gain a deeper understanding of the term 'Re-Experiencing' (*Nacherleben*) which appears frequently in Akira Ikemi's recent writings on psychotherapeutic theories. The paper summarized Ikemi's description of 'Re-Experiencing' and then reviewed mostly Japanese psychology literature with the keyword "Re-Experiencing" (*Tsuitaiken*). An interview with Ikemi was also conducted, where two points were highlighted which were either newly elaborated or were newly emphasized dimensions of 'Re-Experiencing'. Ikemi believes that 'Re-Experiencing' is an inherent human function and that it emerges when one attempts to understand the other's experience as it is. In so doing, 'Re-Experiencing' opens up to novel intersubjective realities.

Key Words: Re-Experiencing; Experiencing; The Understanding of Others; Akira Ikemi

I. はじめに

問題と目的

最近、池見陽が執筆している心理療法論の中に「追体験」という用語がみられるようになってきた（Ikemi, 2017; Ikemi, 2019; 池見 2016; 池見 2019）。アメリカ合衆国の哲学者であり、著名な心理療法家でもあった Eugene Gendlin（ユージン・ジェンドリン：1926-2017）の「体験過程」の概念を遡ると、ドイツの哲学者 Wilhelm Dilthey（ウィルヘルム・デイルタイ：1833-1911）の解釈学的循環に至ると Ikemi（2017）は論じている。さらに、デイルタイの解釈学の中に「追体験」（*Nacherleben*）の考え方があり、ジェンドリンはそれを「交差」（crossing）という彼独自の用語を使って彼の哲学の中でそれを展開させていると池見は論じている（Ikemi, 2017）。

広辞苑によると、「追体験」という語は「(Nacherleben ドイツ) 他人の体験をあとからなぞり、自分の体験のようにとらえること」[広辞苑第六版] で日本人が作った訳語であるが、中国語圏や韓国でもこの語は広く使われている。本来はドイツ語であるこの語に対して英語圏には適切な訳語が存在せず、そのためか英米の心理療法家の理論には追体験はほとんど登場しない。追体験を欧米の英文ジャーナルで取り上げる池見は、そのため、他の欧米の心理療法家とは異なった現象に着目することになった。

池見の追体験理論をさらに探究するために、本論はまず追体験と心理療法についての文献をレビューする。次に池見がどのように追体験を記述していたのかを確認する。そのうえで、池見をインタビューし、そのインタビューを通して、これまで論じられてきていなかった新しい側面があるかを最後に考察する。

追体験についての先行研究

「追体験」が心理臨床領域でどのように研究されているかを知るために Cinii において「追体験

心理療法」で検索を行った。該当件数は13件あり、それらの研究領域を分類すると、教育学が1件、看護学が3件、福祉学が1件、哲学が1件、比較宗教が1件、社会学が1件、認知心理学が1件、臨床心理学が4件であった。この内、臨床心理学の3件（平野 2016；筒井 2018；後山・永田・金井ら，2018）の著者たちは池见到師事しており、用いられる「追体験」の意味としては池見と同様である。臨床心理学の残りの1件（朽原，2012）においては、「追体験」という言葉が使われているが、内容としては、自分の子どもを抱っこするときなどに生じる母子の一体感や自身の母親との思い出の想起などを「追体験」としている。哲学（入江，2018）においては、デイルタイの「追体験」について記述がなされているが、心理療法との関連については記述がない。また、認知心理学（山本，2008）においてはブルースト現象（においとの遭遇を契機として、過去に経験した出来事があったかもそれを追体験しているかのようにありありと思い出される現象）についての記述がなされているが、心理臨床との関連については記述がない。このように、「追体験 心理療法」で検索した結果、心理療法における追体験の意義を明示的に論じているのは池見及び池见到影響を受けた研究者たちのみであった。なお、英語では「追体験」という語が存在しないために、厳密な英文論文の検索はできない。

それでは池見は追体験をどのように記述しているのだろうか。池見の追体験の記述が最初にみられるのは2016年の著作においてである。その著作では、追体験とは、他者の語りを聞いて、視覚的なイメージが浮かび、「わかる」あるいは「理解する」という体験である（池見，2016，p.91）。人は他者の語りを追体験しながら理解している。追体験は共感に近いが、厳密には違う概念として紹介されている。共感には「私がおの人であったら」という「あたかも性質」（as if quality: Rogers, 1957）があるために、自己投影が必要となる。そのような自己の

投影が必要でない追体験は共感とは異なり、「追体験」という語をもって「共感」と置き換えるべきではないと Ikemi (2017) は論説している。また、追体験は意図してすることではなく、前反省的に立ち上がるために、追体験の方がより基本であると考えられる。

人は他者の体験を追体験するばかりではなく、自分自身の体験も追体験している。Ikemi (2019) では、体験過程が過程として動いていくためには自身の体験・表現・理解についての追体験が必要であると論じられている。

語り手の体験を追体験しているとき、語り手が明示的に語っていない多くの細部が追体験されてくる。このような細部を試しに語り手に確認してみた場合、語り手の体験が豊かになっていく。二人の体験は交差 (crossing) する。そのとき、語り手はそれらの細部が「暗在的」(implicit) であったことに遡及的に気づく。このようにして、語りのストーリーは「私のストーリー」から「私たちのストーリー」になるといった間主観的な展開になっていく (池見, 2016)。

II. インタビュー

小田原：追体験が相互主観的でなく、ただの主観的であることはあるのでしょうか。

池見：ここはすごくデリケートだね。われわれが相手を正確に理解しようとするために追体験が必要になるといえる。正確に理解しようとしなければ、ただ自分の連想を言ったに過ぎない。いまこの曲¹⁾のピアノの鍵盤を叩いている指使いを追体験できるけど、そしてそれはかなり正確に追体験出来ていると言えるけど、この音楽から僕の個人的な連想を話すのとは違うよね。〇〇の××の曲で、とか知識を言い出すと、もうピアノを叩いている手が見えない。そういうように相手の話を聞きながら、その人の体験が、こちらにもリアルに見えてくるというのが追体験で、それはある種のチューニングのようなも

ので、チューニングが外れると、もう浮かんでこない、見えてこない。

小田原：追体験が生じない場合はどういう場合が考えられますか？

池見：その人の体験をそのまま理解しようという目論見がなければ成立しないよね。で、その人が体験していることを変えようとか、それから、その人が体験していることから連想しようとか、その人の体験を評価しよう、分析しようとするときは、追体験ではないよね。

小田原：厳密にいうと、話される内容は体験そのものではないと思うんです。体験そのものをとらえることはできないと思うのですが…

池見：Gendlin の場合は体験も表現も理解も一つ。どれか一つがほかの二つの実例であるっていう見方をしているよね。だから、「私は不安なんです」って言った時は、「不安なんです」は私の体験であり、私が言った表現であり、理解である。

小田原：不安なんです、という言葉から体験を感じようとする態度が追体験には必要ということですか？その態度があると追体験が起こってくる？

池見：そうね。いまどんな風にこのソプラノサクソの人が吹いているか、なんとなく追体験できる。こんな風に力入れてるなどが。

小田原：先生に「ソプラノサクソの人が追体験できる」と言われて、僕の中からだが、ソプラノサクソの音を聞いて、音の強弱を聴くようになったのは、先生の言葉を介して、僕にその態度が出来たから追体験が出来たという理解でいいですか？

池見：うんうん。人はそうやって指し示されたら追体験できる能力を、キャパシティーをもってらんだと思う。普段はそのキャパシティーを使わないんだと思う。今はこうやってソプラノサクソを追体験しているけど、「この音楽どう思う」って聞くと、追体験から離れるよね。で、考えたことをいう。「音楽から何を思い出しますか」っていうとまた、演奏家を追体験すること

から離れてしまう。だから、本来そういうキャパシティーを持っているけど使っていないのかもしれない。あるいは十分に使っていないのかもしれない。僕はわからないけれど、ひょっとしたら動物なんかはそのキャパシティーが強いかもしれない。特に集団行動をする動物は、相手が何を感じているのかを追体験する能力が強いかもしれない。また、追体験はついていくって感じがあるでしょ。Aさんの体験にBさんが追体験するっていう。

小田原：なるほど、順序というか、ターゲットがありますもんね。

池見：犬が2匹でごろんとしてて、1匹は毛づくろいしてて、1匹はほかのことしてても、同時にぱっと同じ方向を見るのとか、何かにおったのか知らないけど、ともに何か感じている。というような共感っていうのがあるのかもしれないけど、追体験っていうのはどっちかにどっちかがついていっているから、どっちかっていうとシンボリックな世界で起こるのかもしれない。

小田原：さっきの話ですと、追体験される対象があって、その理解を伝え返すことによってフォーカシングにおける推進が起こるといふこと？

池見：ここの文脈ではフォーカシングとは切り離れた方がいいと思うよ。これは僕としては、人の心理というか、これはフォーカシングでもクライアント中心療法でも音楽でも一緒だと思うよ。ある人が何かをしゃべっていて、こちらがそれを追体験していて、そして追体験したことを少しいうと、相手の体験が少し変わって、また相手がまた1つ言うと、こっちの体験が変わっていくのかな。人が話しているときに、それを聴きながら追体験をして、こちらが追体験をしていることを言うことで話の展開が変わってきたり、それを受けてこっちの体験がまた変わってきたり、相互に影響しあいながら進んでいく、それがまあ相互主観的な現実…

小田原：さっきシンボリックって言われたのは？

池見：人間の営みっていうのはとてもシンボリ

ック。言葉や音で成り立っているから。それを取り除くわけにいかない。ノンバーバルもシンボリックでしょう。ノンバーバルに首を振っていると、違うっていうことを意味している、シンボルになるでしょう。

小田原：追体験がもともとの体験に影響を及ぼすためには言葉で必ず表さなくてもいい？

池見：もちろんもちろん。なんかお腹空いてるなってときにレストランの見本を見ると、「あ、オムライス」とかって模型を見て、それは言葉じゃないけど、「あ、これだ」とか「これじゃない」とかもそうだけど。オムライスは食べたいが、食べたいというのをオムライスの模型を見るまで気づかなかつたりするよね。それは体験を言い表していくというよりもオムライスの模型が引き出したともいえる。僕の芸術表現論(池見, 2019)の「ギヴズ」なんだけど、オムライスの模型がギブ(与えてくれる)するものは、あの、オムライスの味を引き出してくれる。その後「あ、俺はあれが食べたかったんだ」とわかる。だからもともとオムライスが欲しかったということが隠れていたと考える必要は何もなくて、むしろ引きだしてくれるのね。

小田原：他者の追体験が体験を豊かにすることに意味があるのでしょうか

池見：昨日の晩まで中国に行ってたんだけど、誰かに「中国はどうですか」と聞かれたら、いろんなことが暗在的にあるよね。「意外と近い」とか「未来的だ」とかそれは誰かが僕の体験を追体験しようと思って聞いているからこそ、僕の体験が出てくるんだよね。「そして中国っていうのは、超近代的な部分と超古い部分が混ざっているような気がします」っていうような発言が今初めて言葉になるんだけど、「どういう点が古いですか」とか聞かれると、そうするとさっきまでなかったことがまた、僕の中に出てくるよね。人が僕のことを分かるようにする、あるいは追体験しようとするによって僕の体験を引き出していく、僕の体験が形になっていく。誰もそれを聞いてくれなかったら、多分、そうい

うことは考えもしない。

小田原：追体験が起こるとい現象は人が生来持つ機能ととらえますか？

池見：そうだと思う。人が本来もっているのを再発見するというか、それが大事だと思うね。セラピープロセスでどうかというよりも、人が本来そういうことをしてるんだということ、それが大事だし、オプティマルな（optimal 最適の）人間の意識の機能に追体験があると言ってもいいのかもしれない。それに気づいていなかったりすることもあるかもしれない。ある程度、人は人が体験したことを、最適な状態では自然に追体験していく。相手の追体験能力が過剰に強いのも、逆に全然追体験できないのも何かの障害なのかもしれない。相手の意図が読めないということもあって、スペクトラムがあるのかもしれない。追体験のスペクトラム、面白いね。

小田原：スペクトラムの中を1人の人が行き来することもありますか？

池見：最適には、追体験しようと思うと、追体験することができる。指し示してもそれができないというのは何らかの障害かもしれない。そういうスペクトラムがあるのかもしれない。

小田原：なるほど、1人の人がスペクトラムの中を移動するのではないのですか。ところで、追体験を当人に伝えることにはどんな意味がありますか？

池見：「コンテンツとプロセス」ってよく言われるけど、ちょっと古い経験主義的な考え方だと、僕たちは食べたものを全部記憶している。オムライスはこんな味、チキンライスはこんな味、カレーライスはこんな味っていう風に。全部そういうメニューっていうかコンテンツメニューがある。そして外の世界にそれと対応する現実のカレーライスなりオムライスなりがあって、そこの外の世界と内の世界に求めているもののが一致したときに「あれが食べたい」っていう風に考える。こういう風なコンテンツモデルが世にあふれている。だけどここですごく大事なのは、コンテンツというよりもプロセスと言わ

れているものが、プロセスという言葉をちょっと違う訳をすると「処理」なんだよね。それは情報処理の「処理」。だからそうすると、コンテンツで現実のカレーと無意識のカレーが一致するというよりも、どんな情報処理の仕方をしてカレーを導き出したの？っていう、そこを見るっていうことだよ。そっちの方を優先的に見る。だから過去に形成されたコンテンツがあって食べたことのあるオムライスのリストが心のなかのどこかにあるという考え方ではなく、過去を参照するっていう情報処理過程がまず動くということ。過去に食べたオムライスの味が無意識に残っている、という風に考えるよりも、オムライスという言葉なり模型なりを見たときに過去に食べた味を探しに行く。だから、他者の追体験を伝えると、その伝わってきた追体験によって参照プロセスが動き出すわけ。もし、だれかがその最中に、オムライスにウスターソースをかけたことありますか、とか聞かれると、今度はウスターソースの味とかさっきまで思ってもなかったんだけど、「それいいね」になるかもしれないし、ケチャップと一緒にウスターソースかけたらいいねみたいな。それは無意識に眠っていたかということ、そうじゃなくて、もしそうだとしたら無意識に無限の可能性が眠ってないきゃいけないわけで。そうじゃなくて、今誰かがソースはどうですかといった瞬間に、そこで参照されて、そこで情報処理されて、これが欲しいんだ、あるいは欲しくないんだっていうようにこちらの体験が変わっていく。

小田原：僕の理解ですけど、つまり、例えばオムライスを今食べたいかっていう問いが起こると、オムライスの味を体験しますよね。それはある種、追体験と言ってもいいのかなと思うんですけど。

池見：そうそうそう。自分が追体験してみても、それでこれ食べたいか決める。そこには自分のなかの追体験の過程が生まれている。そして、そこに他者が参加することもできるよね。そのオムライスにソースをかけてみましょうか、み

たいな。こういったときに、自分が想像してなかった味が急に入ってきて、「それもいいね」みたいな新しいものが生まれてくる。そして、Gendlin がいつも言ってるのは、体験はいつも新しい、っていうことを言ってるね。私たちの体験過程はいつも新しい。その新規性をいつも言ってる。だから、そこで食べようとしているオムライスに過去に食べたオムライスと同じじゃない。もうそれは新しいオムライスになっているんだよ。

小田原：追体験と癒しには関係があると思いますか？

池見：僕たちはやっぱり臨床をしているから、クライアントの話を追体験しながら聴いていると思う。ある種、暗黙の基本的な臨床の姿勢というか、これが解説者なら説明しようと思ったり、病気に結びつけようとしたり、過去の体験に結びつけようとするけれど、僕たちはセラピーをやっているから、追体験しながら聴いていくことを第一にしている。それを共感なんていう言葉で言うこともあるけど、追体験をしながら聴いてくれるという体験が何らか、癒しになるんじゃないかな、みたいに思うね。それは何か話をしている相手が、こちらの理論の矛盾点をつこうと思って聞いていると、そういう人と話すのがしんどいじゃない。でも、本当に分かってくれようとしている人と話すと、なんかほっとするよね。「そんなこと分かってくれたん？」とほっとする体験。なんかそういう癒し効果みたいなことはあるんじゃないかなとは思ってた。ただ、それはエビデンスがあるわけじゃない。

小田原：因果的に説明できるものではない？

池見：そうやね、ずっと心理学とか精神療法の伝統で、主観世界と客観世界がピタッと分かれているから、この人が私のことを分かってくれている、というのは僕の主観だろうと。そして本当に分かっているかどうかの客観的証明はできない。でもそこに入るとすべてが主観的になってしまって、人が独我的な世界を生きている

ことになってしまう。そうすると、人は孤立しちゃうと思う。それぞれがそれぞれの主観世界に住んでいて、共通性はイリュージョンだったってことになる。それよりも、人は追体験できる。人だけじゃないかもしれない。動物もそうかもしれない。そういう風に生き物はなっているんだって思った方が、僕はずっと健康的な気がするけど。独我的な世界ではなく、共同の shared わかち合われた主観世界という捉え方。小田原：そこに先生の人生観、価値観、臨床観が含まれている？

池見：僕だけじゃないと思うけどね。現象学も、Carl Rogers のエンカウンターもそうだと思うし。あなたと私が出会うって言うのはそういうことだと思う。あなたの主観、私の主観を超えて出会うって。僕の、あなたの、を超えたところに出会いがある、そしてその出会いは僕もあなたも変えてしまう。

小田原：追体験の中でお互いが暗在されていくっていうことなんですけど、僕が、クライアントに追体験しているつもりでも、向こうには届かないというときには、難しいなって思うんですけど。

池見：Carl Rogers の言葉で言うと、自分の経験に開かれているとか、他者の経験に開かれているとか、そういう場合は割と健康的、いわゆる“十分に機能する人間”になっている。小田原君が言った人達って言うのは、自分の経験や他者の経験に閉ざされている人かもしれないね。割と決めつけている人もいるでしょう。「私は不安なんです」とか「人生は面白くないんです」とか、概念だよな。「あなたが私を分かる訳ないんです」とかって、普段概念先行で本当の意味で体験に開かれていないということかもしれない。

小田原：そういう人に追体験するのって難しいですか？

池見：ああ、僕は何度も言っているけど、追体験って言うのは、特別に意図しなくても起こっている。この人に言っても通じないだろうなっ

ていうときにはもう追体験しているから。人が話しているのを聴いていて、情景が浮かんでいるときにはもう追体験が出来ている。だから、その人が思い浮かべている情景を思い浮かべようとして聴くときもあるよね。勝手に立ち上がってくる場合もあるけど。例えばアニクロ（池見・筒井・平野ら，2019）をして、「犬です」って言われたときに、犬じゃイメージが湧かないから、「どんな犬ですか？」とか「犬種は何ですか？」と聞いて、「レトリバーです」とか言われたら、そこでイメージが湧く。そういう聴き方をしないで、「自分のことを犬と思う人はこういう人かな？」とか、頭で考えながら聴くと追体験ではないよね。自分が体験に開かれていないよね。

小田原：現象として起きるフォーカシングっていうのは、追体験のことですか？

池見：そうよね。「なんか気になることがありますか？」って言われて、今書いている原稿がなんかすっきりしないって言って、それをフォーカシングで見に行こうとするときに、今その原稿を書いていることを追体験するよね。「上海であの人にこう言われたのが気になります」って言ったら、じゃあ上海のその場面を思い出して、それを追体験するよね。フォーカシングっていうのは一種の追体験なんだよ。で、その一種というのは、フェルトセンスやそのときに感じられていた意味を吟味するような追体験のあり方だと言ってもいいかもしれない。

Ⅲ. 考察

インタビューから追体験について、これまでに活字になっていない、新たな見解が提示されていたように思われる。その見解を2つに分けることができる。その1つは、追体験はどのような特徴を有しているか、という点であり、もう1つは聴き手の追体験が話し手にもたらすものである。それぞれについて検討してみる。

1. 追体験はどのような特徴をもつか

追体験は生来人が持つ機能であると池見は考えているようである。普段はその機能に気づいていないか、それを頻繁に使っていないのかもわからない。しかし、それを指し示されると、その機能を使うことが出来る。言い換えると、人が体験していることをそのまま体験しようという目論見があるとき、追体験は立ち現れると言える。このとき、追体験されるのは、人の語りであったり、音楽であったり、模型であったり、あるいは自分自身の体験であったりと多岐にわたるが、それらはシンボリックなものであるということが出来る。また、フォーカシングは、自身の体験をある一定の方法を用いて追体験することである、ということがこのインタビューで明らかになっている。

追体験はその時に特別に意図することがなくとも生起している。話し手の話を聴き、情景が浮かんでいるときには追体験が出来ている。追体験とはある種のチューニングのようなものであり、それが外れると追体験できなくなってしまう。話の内容からその人を分析したり、変化を与えようとしたりする際にはそのチューニングからは外れてしまうことになる。池見は考えている。すなわち、心理臨床面接において、クライアントの体験を変化させようとしたときにはチューニングが外れ、追体験はできていない可能性がある。追体験ができていない関係とは、Buber (1970) が示した I and Thou の関係であると言える。相手の体験を尊いものとして、そのまま理解しようとするとき追体験しているのである。この捉え方は Ikemi (2017) が示しているように、Rogers (1975) の “the process of empathy” にも共通するものであると考えられる。

また、臨床以外の視点で、追体験の機能は動物も持ち合わせているのか、発達障害や Highly Sensitive Person と呼ばれる人々も追体験機能のスペクトラム上での極端さがあるという可能性があるのか、など今後の課題も明らかになっ

てきた。

2. 聴き手の追体験を話し手に伝えることによって何が起るのか

聴き手が話し手の体験について追体験していることを伝えることによって話し手は「わかってもらった」とほっとする安心感が得られると同時に、追体験を伝えられることによって自身の「参照プロセス」が動き出す。その参照プロセスによって聴き手の追体験に近い内容が引き出されてくる。そこで、聴き手と話し手は互いの体験に参加することになり、その時に生まれるものが間主観的な現実である。さらに、この時に立ち現れたものはそれまでのものとは違い、全く新しいものになっている。このようなことは Gendlin が crossing (交差) の概念でも論及しているが、その概念と池見の追体験は厳密な意味で同じかどうかについては、さらに検討する必要がある。

また、聴き手が話し手の体験を追体験していることは、話し手にとっては癒しになっている可能性についても言及されていた。これについては、今の段階では実証的に検討されていない興味深い今後の課題である。

注

- 1) インタビューの背景に流れていたBGMの楽曲。ピアノ曲や後に登場する楽器はそのときどきにかかっていた曲である。

文献

- Buber, M. (1970): *I and Thou*. Trans. Walter Kaufmann, New York, Charles Scribner's Sons.
- Gendlin, E. T. (1995): Crossing and dipping: some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation. *Minds and Machines* 5(4): 547-560.
- 平野智子 (2016): セラピスト・フォーカシングでは新しいクライアント理解はどのように生じているか—体験過程理論からの考察— 『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』 6: 75-85.
- Ikemi, A. (2017): The radical impact of experiencing on psychotherapy theory: an examination of two kinds of crossings. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies* 16(2): 159-172.
- Ikemi, A. (2019): A portrait of the person seen through the four dimensions of Focusing *Journal of Humanistic Counseling* 58: 233-248.
- 池見陽編者 (2016): 『傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング 感じる・話す・聴くの基本』 ナカニシヤ出版
- 池見陽 (2019): 表現のセンスとギヴスの創造的な出会い～体験過程とアートの相互作用をめぐって～ 臨床描画研究 34: 64-85
- 池見陽・筒井優介・平野智子・岡村心平・田中秀男・佐藤浩・河崎俊博・白坂和美・有村靖子・山本誠司・越川陽介・阪本久実子 (2019): アニクロ：体験過程理論から見出された実存的なワーク *Psychologist: 関西大学臨床心理専門職大学院紀要* 9: 1-12.
- 入江祐加 (2018): デイルタイの美学・文芸論における人間本性の心理学的分析 *メタフュシカ The Journal of Philosophy and Ethics* 49: 141-152.
- 串崎真志 (2019): 高い過敏性をもつ人 (Highly Sensitive Person) は物事を深く考える (1)～スピリチュアリティとの関連～ 『関西大学人権問題研究室紀要』 78: 1-14.
- 栢原京子 (2012): 乳幼児を育てる中で母親が体験する、自身の乳幼児期の「ポジティブな追体験」に関する一考察 *近畿大学臨床心理センター紀要* 5: 11-22.
- Rogers, C. (1957): The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Philosophy* 21(2): 95-103.
- Rogers, C. (1975): Empathic: an unappreciated way of being. *The Counseling Psychologist* 5(2): 2-10.
- 筒井優介 (2018): 夢 PCAGIP において意味はどのように成立しているのか—ある妊娠の夢を事例として— *人間性心理学研究* 36(1), 21-31.
- 後山未来・永田雅樹・金井孝俊・垣垂紗妃・甲山めぐみ・水村明音・吉川真央・池見陽 (2018): 夢 PCAGIP における夢の意味の創造性—ホラーから友情物語に姿をかえた夢— *サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要* 8: 1-10.
- 山本晃輔 (2008): においによる自伝的記憶の無意図的想起の特性—プルースト現象の日誌法的検討— *認知心理学研究* 6(1): 65-73.